
日常トリム

つぶやきここえ & くがつあき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日常トリム

【Nコード】

N9166S

【作者名】

つぶやきこごえ&くがつあき

【あらすじ】

日常トリムは月ごとのイベントをテーマにした日常を文章と絵で切り取ったオムニバス作品です。

四月一日の道化（前書き）

エイプリルフールのお話です。

挿絵を入れてみましたがあくまで試験的なものであるため、見づらいかと思われます。画像の大きさなどに関してもご意見などいただけると幸いです。

四月一日の道化

四月一日。

部活で春休みの学校を訪れていた私はそのついでに、友人の忘れ物を取りに教室へと向かっていた。

わざわざこんな日に頼んでくるあたり、私を騙す嘘なのではと疑ったのだが、どうやらそういうわけでもないらしい。

結局、素直に友人の忘れ物を取りに行くことにした私は、たどりに着いた教室で思いもよらない人物と遭遇する。というより、誰かがいることさえ思いもよらなかった私は、正直かなり面食らった。相手はというと、やってきたのが他ならぬ私だったということに驚いたのだろ。その口から「嘘だろ」という呟きが漏れる。

彼の名前は水下修治。私、木崎晴子の幼馴染である。そして彼の呟きは、お人よしで馬鹿者の彼の昔からの口癖だった。ただ今回に限っては、疑念というより彼自身の願望を口にした言葉だったのかもしれない。

頼まれて仕方がなく友人の忘れ物を取りに來ただけなのに、まさか存在の消滅を願われる羽目になるとは。こちらこそ嘘でしょと呟きたくなる不遇さである。そもそも部活に入っていない水下が春休みの教室にいる方がよっぽど嘘か何かのようだった。

「春休みだっていうのに、なんで教室にいるの？」

不思議に思った私は窓際で固まる水下にそう訊ねてみた。誤魔化そうとしてか、彼は質問で返してくる。

「そういう木崎は、どうして教室にいるんだ？」

「私は部活。と、ついでに志藤に頼まれてあいつの忘れ物を取りに來たの。で、水下は？」

あっさりと答えた後で、再度質問を投げかける。観念したのか、水下は歯切れの悪い調子ながらも白状をした。

「いや、俺も忘れ物を取りに……」

答える水下の目はこれでもかというくらいに泳いでいる。すぐに嘘を吐いているのだとわかってしまった。そうでなくとも、一向に忘れ物とやらを探そうとしない時点で嘘なのは明白である。

さすがにこの程度の嘘で騙されるのも白々しく感じた私は

「どうせ吐くならもう少しマシな嘘を言いなよ」

と進言した。私の言葉に、水下の表情がまたしても驚きに染まる。

まるで「嘘だろ」とでも言いたげな面持ちだった。あの嘘で騙せると思っていたことに対して私も同じことを言ってやりたい。

黙りこくる水下をさて置きつつ、程無くして友人の忘れ物を鞆にしまった私は、埒が明かないと感じて思い切って訊ねてみることにした。

「誰か待つてるの？」

何をするでもなく、一人教室にいる理由といえそれが妥当であろう。そしてその後のことも、概ね見当が付く。

肯定も否定も、誤魔化すことさえもせずに押し黙る水下に私は続けて聞いた。

「ひよつとして、さやか？」

水下は沈黙を保ったまま。私の質問は続く。

「告白するの？」

その問いを最後に、私も口をつぐむ。やがて、やけに重たい沈黙を、決意するかのような間を持たせた後で水下が破った。

「……告白した」

私が全く予想だにしなかった答で。

「……え？」

私はついついそんな間の抜けた声をあげていた。改めて訊ねようとすると、何から訊ねるべきか迷ううちに、水下が先んじて恥を忍ぶように俯き言っ。

「寺石に告白して、フられた後だよ」

どこまでも沈んだ水下の声。思い出すことさえ苦痛な程ショックだったのが窺える。

寺石さやかとは私と水下の共通の友人で、この一年間同じクラスで多くの時間を共にした女子だった。特に馬鹿正直で騙されやすい水下は、嘘を吐いて人をからかうのが大好きなさやかにとって格好の獲物だったようで、しょっちゅうその相手をさせられていた。

そんな彼女にいつの間にか水下は惹かれていき、そして今日告白をしたのだそう。しかも既にフられ済み。もう長い付き合いになる私もそうそうお目にかかることのない落ち込みようだった。

「ふーん。そっか」

私は一人で勝手にショックを受け、そんな返事をするのがやっただった。

水下がさやかのことを好きなのは気が付いていた。今更それを知ったところで、別段ショックを受けるようなことではないはずである。

だというのにショックを受けてしまうのは、きっと心のどこかで水下が否定してくれるのを期待していたからなのだろう。彼の口からさやかが好きではないと聞きたかった。その一言が聞きたかったがために、よせばいいのに質問をした。その拳句、真実を知り一人で落ち込んでいる。

それならいつそ聞かなければよかったのだ。水下の下手な嘘に騙されたフリをして、さっさと部活に行ってしまうのが賢い選択だった。そうすれば、まだ真実を知らずにいられた。

それでも、聞かずにはいられなかったのは、つまり、私が水下のことを好きだったからということなのだろう。

水下への本当の気持ちを、他ならぬ彼の口から聞いたことでそのことに気付かされるとは、なんとも皮肉な話だと思った。

いや、本当はもっと前から気付いていたのかもしれない。ただ単に認めたくなかっただけなのだ。

「ねえ水下。さやか、断るときに耳の後ろ辺りを触ってなかった？」
「触ってたと思う。でもなんでそんなことわかるんだ？」

唐突な私の問いに、そのときの情景を思い出したのか答える水下の

面持ちは一層暗くなる。そんな水下に「いいこと教えてあげる」と前置きした後で、私は彼の知らない、とっておきの情報を伝えた。

「さやか、嘔吐くときに耳の後ろ辺りを触る癖があるんだよ」

「え？じゃあ……」

数秒かけて私の言葉をじつくりと理解した後、水下はそのことが示す事実にとどり着いたらしい。

さやかは水下の告白に嘘の返事をしていた。つまりそれはさやかもまた、水下のことを好いているということを示していた。

当の二人がお互いにそのことに気付いていなかっただけ。気付いていたのは私だけ。私だけが、自分の気持ちが報われないことを知っていた。

だから自分の気持ちを認めようとしなかった。

認めなければ、報われないとしても傷つかずに済むと思っていたから。

「今日ほどあの子の嘘に気を付けないといけない日はないでしょ。」

何回さやかに騙されたら気が済むの。ほら、さっさと追いかけてもう一回告白しなよ」

茫然としていた水下は、私のその言葉に鞭打たれたように走り出した。相当焦っているのか、机と椅子にあちこちをぶつけながら教室の入り口を目指す。見ているこっちにまでもどかしさが伝わってくるようだった。

勢いそのままに教室を飛び出していかと思われた水下が、不意にこちらを振り返る。その顔には先程の憂いがなく、ただ、穏やかな笑みをたたえていた。

「ありがとう。木崎」

そして恥ずかしげもなく、大真面目に礼を言う。昔から少しも変わらない、お人よしの馬鹿者。

そんな彼を好きになった。その想いが、認めざるをえない私の真実だ。だが今更それを告げられるはずもない。

私の本当の気持ちを伝えたところで、水下が笑顔になるわけでは

ない。それに、彼が今笑っているのは、さやかの本当の気持ちを知らることができたからなのだ。

私の役割はさしずめ、偽りの気持ちの下で泣きながら、彼を笑顔にする道化といったところだったのだろう。

それでもいいと思った。

「気にしないで。……あ、それとき、水下」

それでもいいと思ったのに、私はそう呼びかけていた。

今日という日が四月一日、どんな嘘も蔓延り跋扈するエイプリルフルだったからだろう。

「……私、水下のこと好きなんだけど」

私の、十数年大事に持ち続けた、けれどもずっと、見て見ぬふりをしてきた嘘偽りないその想いは

> i 2 5 0 4 9 — 3 2 4 5 <

「……なんて、嘘」

こんな形でしか伝えることができないと思ったから。

「……こんな嘘にもひっかって。そんなんじゃまたさやかに騙されちゃうよ」

呆気に取りれたままの水下をからかうように私は言う。対する水下はいたって真面目な顔で

「……そういう嘘は好きじゃない」

と呟いた。この一年、さやかに幾度となく嘘を吐かれていた水下の口から出たとは思えない言葉に、私は少々戸惑いを覚える。

それもそうか。

好きとか嫌いとか。そういうことは嘘でも言えなかったのだから。「ごめん。でもエイプリルフルだからさ。さやかのことも許してやってよ」

誤魔化すように私がそう言い繕うと、水下は何か言いたげな顔をした後で、しかし何も言わずに立ち去った。その足音が遠ざかり、やがて聞こえなくなる。

「……嘘でしょ」

思わず水下のように眩いていた。目の前にある現実に対する疑念ではなく、願望を口にした言葉。

誰もかれも嘘を吐くエイプリルフールなら、現実の一つや二つが嘘になったっておかしくない気がしたのだ。

ただ、何が嘘だったらよかったのか、わからなかった。

さやかの水下への想いか。水下のさやかへの想いか。私の水下への想いか。

いつまで経っても、答は出そうになかった。

四月一日の道化（後書き）

オマケへ続く

四月一日の道化 オマケ（前書き）

本編より文字数が多いというオマケとは名ばかりのモノとなっております。

舞台は本編の七年後。本編に名前しか出てこなかった人物も登場しております。

四月一日の道化 オマケ

「っていうことがあったのよ」

そう言つて、思い出話を締めくくる。七年も前の出来事だと言うのに、語り出すと記憶というものは次から次へと蘇るもので、気付けば長いこと一人で喋り続けていた。渴いた喉をぬるめの紅茶で潤しつつ、向かいに座る聞き手の方を覗くと

「なるほど。で、水下と寺石は付き合うことになったと」

と、彼は更に思い出話を総括するように言つた。感想らしい感想はないらしかったが、時折のぞく憂いの表情が、彼の心の内を如実に表していた。なんとも彼らしくない表情だと私は思った。

彼の名前は志藤謙介。高校一年生の頃にひよんなことから知り合い親しくなつた同級生である。二年生になると、陽気な彼は私の幼馴染にして馬鹿正直者の水下修治にちよっかいを出し始めた。そこに嘘が大好きなクラスの女子、寺石さやかが加わり、それ以降は私を含めた四人で行動を共にすることが多くなつていった。

イベント好きで陽気な性格の志藤の行動力は止まるところを知らず、私たちどころかクラス、ひいては学年学校全体を巻き込んでいき、結果的に私は多くの騒動の中心に関わつていくことになる。当時こそ迷惑極まりないと思つたものだったが、今となつてはどれも良い思い出となつていた。

とはいえ、つい先ほど彼に話していたのは、とても良い思い出とは言いがたいものだつた。七年前のエイプリルフル。三年生への進級を控えた春休みに起こつた失恋の話である。

部活で春休みの学校を訪れた私は、そのついでに忘れ物を取ってくるよう志藤から頼まれた。そうして訪れた教室で私は水下に遭遇する。水下は想いを寄せていたさやかに告白し、フられた後だつたのだ。

しかし水下の話から、私はさやかが嘘を吐いていることを見抜い

た。そうでなくとも、さやかが水下のことを好いていると私は知っていた。だからこそ私は、水下への恋慕に気付かぬフリをし続けていたのだから。

私はさやかの吐いた嘘を水下に教え、改めて告白をするよう告げた。自らの気持ちには嘘を吐いて。

結果、水下とさやかは恋仲となり、私は嘘だと偽ることでしか自身の想いを告げられず、その後も偽りの気持ちの下で涙を流し続ける羽目になるのだった。

志藤はというと、あの日何があつたのかを私たちに訊ねることは決してしなかった。結果だけを受け止め、ぎこちなくなつた私たちの仲を取り持つように尽力し、更には周囲を巻き込んでまたしてもお祭り騒ぎを始めたのである。おかげで私は水下とさやか、二人の大切な友人を失わずに済み、卒業まで以前と変わらぬ日々を送ることが出来た。そして今も、水下とさやかとは連絡を取り合っている。

志藤とも相変わらず仲良くやっている。しかしながらもう長い付き合いになるにも関わらず、私も彼も中々あの日の話題に触れようとはしなかったため、私は彼に礼を言うことさえできずにいた。

久しぶりに都合を合わせて再会した今日、思い切つて礼を言つてみたのがつい先程のことであり、志藤はあの日に何があつたのかをようやく訊ねてきたのだった。

「あの時はごめんね。忘れ物を届け忘れちゃつてさ」

今の今までの日のことに触れてこなかったものだから、これから先も話題に上がることはそうないだろうと感じた私は、お礼と共に言いそびれていた謝罪をすることにした。あの日私が志藤の忘れ物を届けずにいたせいで、彼は新学期早々教師から大目玉を喰う羽目になったのだ。本来なら志藤から責められてしかるべきだったのだが、当時の私の心境を察してか彼はそうしなかった。それが気がかりだった私は、今更ではあるものの恨みごとの一つや二つを甘んじて聞くつもりでいたのだが

「謝るのは俺の方だよ。俺のせいでそんなことになつたんだから」

志藤は文句を言うどころか、頭を下げて私よりも申し訳なさそうに謝るのだった。思わぬ反応に戸惑いつつも、私はきっぱりと言う。

「何言ってるのよ。私、志藤のせいだなんて思ってるわ」

確かに、あの日志藤に頼まれて教室に行っていなければと考えたことがあるのも事実だ。当時、同じように謝られていたとしたら私は志藤にあたり散らしていたかもしれない。

だが志藤が頼みごとをしたのは偶然なのだ。彼が責められる道理はない。それくらいは志藤にもわかっているはずなのに、と私が訝しんでいると

「……あの日、水下が寺石に告白することを、俺が知っていたとしても、か？」

志藤は躊躇いがちに、そう問いかけてきた。

「え？」

理解が及ばず私がそんな声を上げると、志藤は覚悟が決まったのか、顔を上げてから事の次第を詳らかにしてみせた。

「俺は、水下が教室で寺石に告白するのを知っていて、木崎に忘れ物を取ってこさせたんだよ」

つまりあの日の出来事は、決して偶然などではなく、志藤によって引き起こされたものだったというのか。志藤の言葉をようやく理解まで漕ぎつけた私は「……どうして？」という問いをかううじて紡ぐ。

「お前が水下のことを好きなのは知ってたから。そのことを水下に伝えるチャンスくらいあってもいいんじゃないかって思ったんだ」

志藤はそこで一旦区切り

「それが余計なことだったって、今は本当に申し訳なく思ってる」私の目を真っ直ぐに見て、改めて謝罪の言葉を口にした。そんな彼の姿に、私はやるせない気持ちでいっぱいになる。

私は、志藤に謝ってほしくてあの日の真実を語ったわけではない。たとえばあの日の出来事が志藤によって引き起こされたものだとすると、彼はその行為を悔いて私たちの仲を取り持ってくれた。私が言

いたかったのは、その礼だったというのに。

「やめてよ、もう。別に、後悔とかしてるわけじゃないんだから」
私はわざとらしいくらいに明るく、志藤に向けて言った。そうでもしなければ、彼は己を責め続けることになるだろう。それを止めることが出来るのは、あの日の当事者である私だけなのだ。

しかし志藤は納得のいかないと言った風に表情を険しくする。その様子にますます戸惑う私の目をしっかりと見据えて、志藤は告げた。

「自分じゃ気付いてないのかもしれないけどな。お前、嘔吐くときまばたきが速くなるんだよ」

「嘘」と聞き返すと

「本当」と素早い切り返し。それから小さく嘆息する志藤。さも、やっぱり気付いてなかったか、とでも言いたげである。

「今後悔してないって言った時も、まばたきが早くなった」

今まで誰にも指摘されなかったが、そんな癖があったのか。自覚などなかったが、いずれにせよ私が嘘を吐いていることは事実だった。反論の余地はない。黙りこくる私に、志藤はだいぶ逡巡を見せてから言った。

「この期に及んで嘔吐くことなんてないだろ」

そのどこか苦しい表情を見た私は、志藤があの日のことを話題にしようとしなかった理由が分かった気がした。きっと彼は、自分のせいで私がどんな思いをしたのか、それを知るのが怖かったのだろう。私が彼を恨んでいるかどうかは関係ない。私の受けた傷が、そのまま彼に罪となつてのしかかるのだから。

今だって、後悔してないという私の嘘に騙されたフリをすれば、彼はこれ以上罪悪感を抱えずに済むはずだった。……それでも、こうして苦渋に満ちた表情を浮かべながらも私の嘘を指摘したのは、彼が真実と向き合おうとしているからだろう。

私だけが、嘘で誤魔化そうとしている。七年前のあの日まで水下への気持ちに気付かぬフリをし続けたように、あの日の傷と涙を見

ないようにしてきたのだ。

そうして後悔をしたというのに。

「……そうね。本当、その通りだわ」

志藤の言葉に自嘲気味に同意した後、私は七年間見て見ぬふりをし続けた本心をさらけ出すことにした。

「でも、志藤のせいじゃないっていうのは本当よ。あの日の出来事を招いたのは私自身の責任。自分の気持ちに嘘を吐き続けたツケを払っただけなんだから。……ただ、あの日嘘を吐いたせいで、自分の気持ちを偽り続けなきゃならなかったのが、少しだけ心残りかな……」

告白は、自分で思っていたよりも落ち着いて簡潔に終わった。気付かないふりをしてきたつもりでも、七年もの間今と同じ言葉を繰り返して、もうとつくに後悔し疲れていたのかもしれない。だからといって、後悔が消えてくれるわけではないのだろうが。

沈黙する私を見て告白が終わったことを察したらしい志藤は、不意に質問をしてきた。

「なあ木崎。さっきのまばたきが早くなる癖。誰が教えてくれたと思う？」

答えられない。少し考える時間を与えられても、皆目見当がつかなかった。そんな私の様子を見て、志藤は意味ありげに笑ってから正解を明かした。

「水下だよ」

「嘘」と聞き返すと

「本当」とまたしても素早い切り返し。そしてまた、やっぱり気付いていなかったか、とばかりに志藤は溜息を吐く。

今度ばかりは納得いかず、すかさず私も言葉を返す。

「いつ？いつからあいつそんなこと知ってたの？」

「ずっとずっと昔からだそうだ。十数年も幼馴染をやっているれば、それくらい気付くんだら」

「じゃあ何？あいつ、あの日私が『好きなのは嘘』って言ったのが

嘘だってわかってたってこと？」

「そういうこと」と頷いた後で、志藤は種明かしをするように言った。

「あいつが嫌いな嘘っていうのは、本当のことを嘘だと偽る嘘なんだよ」

あまりにも想定外の話に混乱極まる私の頭では、導き出されるはずの結論がなかなか出てきてくれない。代わりに志藤が、その結論をはっきりと言葉にしてみせた。

「水下はさ、木崎の本当の気持ちに気付いてたんだ」

…… ああそうだ。つまりはそういうことだ。

「…… なんだ、初めからばれてたんだ」

全てを理解した私はそう呟き、思わず吹き出してしまった。

今の今まで、偽った気持ちの下で泣き続けて道化にでもなったつもりでいた私が、それこそ本物の道化のように滑稽だったからだ。

あの日の去り際の、何か言いたげな水下の表情を思い出す。水下のことだから、私の気持ちに応えられないことを申し訳なく思っていたのだろう。本当にどこまでもお人よしの馬鹿だ。

そんな彼を好きになった。その想いは、確かに届いていたのだ。

「それなら志藤が気に病むことなんて、もう何もないよ。それだけで後悔する必要なんてもうなくなったもの。…… それに」

私は改めて、志藤に明るく言葉を掛ける。

あの日、偽りの気持ちで笑う必要なんてなかった。その気持ちの下で涙を流す必要もなかった。七年前の四月一日の道化など、初めから存在しなくてもよかったのだ。…… もしその存在に意味があったとすれば、それは、自分の行為に罪を感じながら生きてきた目の前の彼を、罪の意識から救い、笑わせてやるくらいのものだろうか。

「私、今幸せだから」

言いつつお腹のあたりをさする私の左手の薬指を見て、志藤は私の言わんとすることを察しただろう。だが彼は、あえて確認するように私の目をじっくりと見た後で

「嘘、吐いてないみたいだな」

と顔をほころばせた。

「当たり前でしょ」

と、私も笑みを返す。

その笑顔が、悲しみを隠し、誰かを騙そうとするための偽りの面ではないと、今なら自信を持ってそう言える。

l e t t e r (前書き)

母の日のお話です。

letter

五月十日、自宅に一通の手紙が届いた。宛先は久遠明日香。差出人も、久遠明日香。それは記憶の片隅に追いやられていた記憶。

「十年後のわたしへ」

ポストから取り出したのが自分で本当に良かった。

「お元気ですか？今の私は、元気ではありません」

知らんわ。いや、知ってるけど。

「単刀直入に聞きます。二つの誓いは守れていますか？もし片方でも守れていないのなら、もう一度十年前の気持ちを思い出して下さい」

誓いなんて意外と可愛いこと言うじゃん、私。

「最近わたしの周りですごく風邪が流行っています。体調にお気を付けて」

そして心配されて手紙は締め括られていた。ごめん、今ちょっと風邪気味。と、そんなことはどうでもいい。今大事なことは一つ。誓いなのだ。

十年前、幼なじみである東郷俊太郎 トウゴウシュンタロウの母が亡くなった。当時シュンタは魂が抜けたような顔をして、突然泣きだすような状態だった。そんなシュンタを見てられなくて、でも何の力にもなれなくて、そんな日々が続くのがただただ悔しくって。そこで書いたのがこの手紙。当時の私にとって縋るような思いで紙に「証拠」を残し、変わることを誓った。一つ、シュンタを笑顔にすること。一つ、母を大切にすること。

この手紙をポストに入れてくれたのは、シュンタだ。一つ目の誓いを達成した時に手紙を渡しておいたので間違いない。…よく忘れずに届けてくれたものだと思うが。問題は二つ目の誓いだ。

「母親を大切にするねえ」

超難題である。本日提出かつ全く手を付けていない課題を仕上げるよりも困難を極める。

私は母が嫌いだ。それは今も昔も変わらない。ただシュンタのお母さんが亡くなられた時、母を失うこととはどのようなことか考え、ぞつとした。

「変わらな、い…？」

当時、放課後の家事を強制されていた私にとって母がいなくなることはむしろ負担が減るだけのことだと思ってしまったのだ。

「じゃあ何で誓いなんてたてたんだっけ」

そう、確かに当時の私はそう思っていたはずだ。シュンタのお母さんが亡くなってしまったからって、それだけで自分の母を大切にしようなんて思う私じゃない。

悩んでいると突如インターホンがなった。

「明日香ー、いる？」

「シュンタ？開いてるから入っていいよー」

そう言うのと玄関の開いた音がして、ちゃんと鍵を閉める音もしてシュンタが私の部屋までやってきた。

「女の子の一人暮らしで鍵を閉めないなんて無用心だよ」

「ここ、一応実家なんだけどね」

「半分一人暮らしみたいなものじゃないか」

「まあ、確かにね」

苦笑いする私に対し呆れたような視線を送るシュンタ。

「で、今回は瑠美さん何日くらい帰ってないの？」

「たまに私が寝てる時間に着替えとか寝に帰ってきてくることもあるけど、かれこれ半年くらい会ってないかなあ」

「そりやまたずいぶん長いこと」

どこをほつつき歩いてるのは知らないが、このまま一生帰って来ないで欲しいと切実に思う。

「そういえば、手紙。何て書いてあったの？」

「読んでないの？」

思い出したようにシュンタが聞いてきたが、私にとってこの質問は意外だった。

「当たり前だろ。他人の手紙を読むわけないだろ」

それはそうだが、ポストに入れず人に届けてもらうよう頼んだ手紙なんて一度は見られて当然だと思っていた。

「シュンタがいい子に育ってくれて、お姉さんは嬉しいなあ」

十年前の苦境を乗り越え、当時から想像出来ないほどにいい子になってくれて本当に嬉しい。

「誰がお姉さんだ。てか、育てられた記憶なんて一切無いわ」

そんなことを言いながらそっぽを向く。

「あらあら、反抗期かしら？」

「うるさい。そんなことより、手紙。見ていいなら勝手に見るぞ」

「どうぞご自由に」

手紙を渡すなり、ものの10秒で読み終えた。

「二つの誓いつて何？」

まあ、当然聞かれるとは思っていた。

「一つ目は秘密。もう一つは、母を大切にする」

「お母さんを？明日香が？」

「ええそうよ。ただ、自分でも何故そんな誓いを立てたのか思い出せなくて」

「十年前ってことは、そっか。でも、人の親が亡くなったからって自分の親を大切にするような人間じゃないしなあ、明日香は」

よくご存知で。

「そもそも、何故誓いなんて立てたの？別に明日香には必要ないものではなかったの？」

「必要だったよ。実際、誓いのおかげですごく頑張れたしね」

ふと、窓の外を見てみる。庭が見えて、鳥が見えて、シュンタの家も見える。そうそう、夏になると二人で花火大会の花火もこの窓から見てたっけ。昔と変わらない風景がそこには広がっていて、昔み

たいにシュンタと二人でお話して。なんだか懐かしい。

「変わりたかったの。無力でダメダメな私から、一生懸命頑張っ
てなおかつ結果を残せる私に」

10年前のことなんて思い出せないけれど、母を大切に出来る人間
というのがあまりにも当時の私には想像出来なくて、今の自分とか
け離れてるから自分が変わったと自覚できる、言わば変化の象徴的
なものだったのかもしれない。

「結局、変われなかったのかな、私」

そう考え出すと、なんだか悔しい。シュンタは元気になってくれた
けど、守れている誓いは一つだけだ。つまり、自分で立てた誓いす
ら守れないような弱い人間になってしまったということだ。

「なんて顔してんだよ、お前」

「……え？」

「いいんだよ、明日香は変わらなくて。馬鹿みたいに明るくて、お
節介で、気まぐれ人間だけど。昔から変わらないでいてくれたから、
俺は母さんの死から立ち直ることができたんだ」

「でも、シュンタはちゃんと成長してるのに、私は全然……」

「だったら、今からでも遅くないだろ？久遠明日香ともあるうもの
が、何諦めてんだよ？」

にっと、笑顔でそう告げる彼を見て、思わず私は笑い出す。

「な、何笑ってんだよ」

「シュンタのクセに、生意気よ」

変わったシュンタと変わらない私。シュンタが変わって私は嬉しい、
私が変わらなくてシュンタは嬉しい。なら、変わらなくてもいいの
かな。

その日、シュンタは夕食を食べてから自宅へ帰った。お世辞か本
当か知らないけど、いつも美味しい美味しいって言って食べてくれ
るから作り甲斐がある。シュンタが帰った後、シャワーを浴びて布
団に入るとカレンダーの文字が目に入った。

「Mother's Day……」

そういえば、今日は母の日か。

「今からでも遅くない……のかな？」

だったら、昔なんて関係なく、今の自分の思うようにやってみよう。思い立ったが吉日、すぐに渡しは手紙を書き自宅のポストへと入れた。あの人が帰ってきたらポストを必ず確認するのを私は知っている。いつ読むかわからないけど、むしろ読むかどうかすら分らないけれど、それでも、私は一歩進歩したと信じたい。

久遠瑠美様へ

お元気ですか？風邪の一つでもひいてくれていると嬉しいです。今私はご近所の東郷さん家の息子さんとお付き合っています。俊太郎っていいです。どうせ覚えてないでしょう？瑠美さんが帰ってこないと二人で広いお部屋をゆったり使えるので快適です。もう帰ってこないで欲しいです。

本題に入りますが、今日は母の日と言う事で筆を執りました。十年前の私からの指令だったのですが、反吐が出そうで大変です。それでも瑠美さんに伝えたいことがあります。

私を産んでくれてありがとう。お母さんが私を産んでくれなかったら、私はシュンタとこんな幸せな毎日を送ることが出来ませんでした。きつとお母さんはお父さんのこと嫌いだったから、お父さんの血が混じってる私のことも大嫌いかと思っています。結構です、私もお母さんが大嫌いです。でも、それでも。年に1度くらいだったら私の前へ顔を出して下さい。その日だけはお母さんの分も夕食くらいは作ってあげます。

それでは、体調にはお気をつけないで。

久遠明日香

> i 2 6 7 6 8 — 3 2 4 5 <

l e t t e r (後書き)

オマケに続くかもしれません

梅雨の雨の憂鬱（前書き）

梅雨のお話です

梅雨の雨の憂鬱

「雨、降りそうだな」

六月の上旬。晴れた日が続いたせいか久々の曇天に少し憂鬱な気分になる。こんな日は外に出ず家で大人しく勉強でもしているのが吉だと思い鞆を開くが、お目当ての教科書が見当たらない。

「おまけにこういう日に限って学校に忘れ物するなんて、何やってんだか」

憂鬱な気分はさらに加速する。このまま他の教科の勉強をしても良いのだが、如何せん気が乗らない。こういう時はどうしよう。

「昔だったら、迷わず桜に借りに行くんだけどなあ」

現実味を帯びない独り言をつぶやき、憂鬱を通り越して鬱になりそう。

「逆転の発想だ。外に出れば気分も変わる、本来やる予定だった教科の勉強なら気分も乗る」

だったら、雨が降り出す前に学校へ取りに行ってしまうおう。天気予報では夜から雨が降りだすと言っていた。そして現在時刻は四時ジャスト。まだ行ける。念のため折りたたみ傘を持って行き俺は学校へと向かった。

「天気予報のバカヤロウ……」

学校へ到着し教室で自分の机の引き出しを漁っている最中、外の音が変わったことに気がついた。廊下の開いた窓からは冷たい風も入ってくる。そもそも梅雨のこの時期に雨が突然降ることなんて想定内だったし、傘もちゃんと持ってきているから困ることなど別に何もないのだが、それでもやはり嫌なものは嫌だった。

「昔は雨、好きだったのにな」

雨の日にもいつも泣いている女の子がいた。その子は俺が傘を差し出すと途端に笑顔になりだして。気のないふりをする俺は相合傘しな

がら真っ赤になって。そんな幼い頃の当たり前が遠い存在になったころ、俺は雨の日が好きでは無くなった。もちろん、その頃の思い出は今でもとても大切に思っている。好きな子を純粹に好きであれたこと、好きであることが迷惑にならなかった頃のこと。今はかけ離れすぎて、思い出すだけで涙が出そうだけど。

「あー、憂鬱だ」

何故雨の日はここまで人を憂鬱にさせるのだろうか。

そんなことを考えていると、チャイムが鳴った。それと同時に近くの教室が開く音と、中から出てくる生徒たちの足音と話し声。

「今年ももしかすると花火大会の日に仕事入ってしまうかも」

「そう、か。わかった。じゃあしつかり予定空けておくよ」

この声は、学校の名物委員長と副委員長の声だ。二人がいると言うことは、今日は学級委員会が行われていたのか。

「嫌な予感がする」

こういう日の嫌なカンと言うものは得てして当たるものだ。俺はするりと教室を抜け出し、図書室で少し時間を潰してから帰ることにした。

三十分程度経った頃、俺は下駄箱へ向かった。雨が止んでから帰りがかったのだが、雨足は先程よりも強くなっていてこれ以上待つても悪化する一方だと判断した。靴を履き替え外へ出ようとするが見覚えのある女の子がいた。……本当に、何故こういう日の嫌な予感というのは当たってしまうのだろうか。

「桜」

ちよつと前までは学園の人気者だったのに、高校生になると同時に女優にもなり、現在では国民的人气者へとなった俺の幼馴染、近衛桜。彼女とは昔よく遊んでいたのだが、気づけば遠い存在となっており、今ではすっかり疎遠になってしまっている。学級委員会があったのだから俺が教科書を取りに来た時点で学校にいた事はわかっていたのだが、わざわざ時間を置いたのに鉢合わせるとは思って

いなかった。

「あつ」

桜が俺に気づいて小さく声をあげた。

「誠君も今帰り？」

「ああ」

桜は昔と変わらず笑顔で話しかけてくる。傘も持たず立ち尽くし困り顔で外を見つめる彼女に対し、俺はわざと素っ気なく返す。正直、あまり関わりたくない。

本人は意識していないように思えるが、桜が過度に男と仲良くしているのが目撃されたらきつと良くない。それも、こんな冴えない男と。桜にとっては幼馴染と仲良くするのは当然のことなのだろうが、周りはきつとそう評価してはくれない。どんなに桜や俺が昔と変わらない関係を望んだところで、それは到底叶うはずのない願いなのだ。お互い成長し、歳が変わり、身体が変わり、容姿が変わり、立場が変わり、進む道が変わり。何もかも変わらねばならぬ。年頃の俺達だからこそ、変わらないことの方が難しいのだ。

「じゃあな」

だから俺はなるべく桜を避けるようにしていた。例え自分の想いを殺してでも。

「ばいばい……」

すれ違いざまに声をかけられ思わず一瞬桜の方へ振り返る。振り返ってしまった。そこには久々に直視した桜の顔と、今まで見たことのない悲しげな表情。俺は何故こんなことをしているのだろう。俺は桜の為を思っただけのような態度をとってきたつもりだった。桜がどう思おうが、結果桜の幸せにつながれば良いと決意していた。なのに。そんな俺の考えをすべて否定するような桜の表情に心が揺らぐ。辛い。つらい。俺はこんな表情を見るためにこんなことをしてきたわけじゃないのに。

「使えよ」

「……え？」

> i 2 6 8 8 5 — 3 2 4 5 <

気づくと、俺は桜に傘を差し出していた。

「だから、使えって。どうせ桜のことだ、傘なくて困ってたんだろ？」

駄目だと思いつつ、昔のような言葉が出てくる。こんな偉そうな言葉遣いじゃ、こんな馴れ馴れしい話し方じゃいけないと思うのに、桜への接し方はこれ以外わからない。

「別に、返さなくていいから」

何が起こっているのかわからないと言わんばかりの桜に傘を押し付け、俺は外へ出る。土砂降りの雨に打たれ髪も服も一瞬でびしょ濡れとなってしまったが、思いの外冷たくて気持ちいい。

「でも、それじゃあ誠君が濡れちゃうんじゃない……」

「もうびしょ濡れ。だから、それは桜が使えって」

俺は走りだす。これ以上一緒にいるのはもう辛い。

「ありがとう！今度ちゃんと返すから。絶対、返すから！」

走り去る俺に桜が叫ぶ。余計なことをしてしまった自分の甘さに呆れながらも「今度」という言葉に期待してしまっている自分もいていろいろ思うことはあるけれど、桜のあんな表情をみないためにこれからどう接するかとか考えたいけれど、とりあえず今はすべてを吹っ切るように俺は帰路を走り続けた。

梅雨の雨の憂鬱（後書き）

オマケに続くかもしれません

花火（前書き）

花火大会の話です

花火

その音を聞いたのは、実に二年ぶりのことだった。

だというのに、もう十数年も前から待ち焦がれていたかのように、いち早く顔を上げてしばしその輝きに見惚れていた。

家の近所で毎年行われる花火大会は全国的にもかなり有名で、各地から多くの人が花火目当てに足を運ぶほどである。当然地元民は毎年花火を拝むことになり、かくいう俺も、そうしてかれこれ十七年あの花火を見て育った口だった。

初めてあの花火を見たのは四歳のときだったと記憶している。あの日はもつと小さい頃から親に抱きかかえられて見ていたかもしれないが、とにかく記憶にあるのは四歳の時に見た花火だった。そしてその時の花火が、今も鮮烈に印象に残っている。

数発の花火が上がっては消えていくのを見届けてから、俺は歩き出す。残念ながら今はいつまでも花火に見惚れている場合ではない。視線を周囲三百六十度にくまなく巡らせながら、空を見上げる人々の間を縫って目当ての人物を探す。

歩き回ること数分。喧騒から離れた小さな公園に、探していた浴衣姿を見つけた。背後では花火が次々と打ち上がる音が聞こえてくる。この公園からは花火がよく見えるものの、やや距離があるために見物客はいない。穴場といえば穴場なのだが、目当ての人物はどういうわけか、花火には背を向けていた。

「泉委員長。ここにおいででしたか。お迎えにありがとうございました」

「……洗くん？有季たちはどうしたの？」

寂しげな後ろ姿におどけて仰々しく声を掛けてみたのだが、これといった反応もなくいつも通りの調子で返されてしまった。

彼女の名前は泉涼子。同学年同クラスの女子生徒である。成績優秀、容姿端麗、スポーツ万能、品行方正と非の打ちどころのない有能さもさることながら、風紀や規律を重んじ生徒会や教師をも差し

置いて運動を断行する実行力から、多くの人間に一目置かれている存在である。学級委員長としての、涼しげな名前を負かしたような氷点下の言動が校内に広く知れ渡っているせいか、とかく厳格で冷めた人間との誤解をされやすく、そのフオーローに努めるのが目下俺の役割であつた。

そんな学級委員長と副委員長としての付き合いはもう一年以上になるが、場を和ませようとしているこの仰々しい第一声に対して反応してくれたことは一度たりともない。意地になって続けてはいるものの、流石に何の反応もなしとなると恥ずかしい。とはいえ、そんな反応にも慣れたもので、こちらに背を向けたままの彼女に近づくながら、いつも通りの口調で答えた。

「先に行つてもらつたよ。妹たちも一緒だ」

花火大会には二人で来たわけではない。クラスの友人や妹たちと一緒に遊びに来ていた。しかしいざ打ち上げ花火が始まるときになつて泉がはぐれてしまい、俺はそんな彼女を探しにここまで来たのである。それもこれも、俺と泉を二人きりにしようという友人たちの企みによるものだった。その理由も大体察しがつくが、迷惑極まりないとは正にこのことである。俺は泉と二人きりになりたいなどと願つた覚えもないし、ましてや友人たちが目論む関係になりたいと望んだりしたこともなかった。泉とてそれは同じだろう。下の名前で呼んでくるのも決して色っぽい事情からではなく、俺の榊原という名字が長くて呼びにくいというただそれだけの理由なのだから。「さあ、俺たちも早く見に行こう」

花火の鳴り続ける背後を気にしつつ、泉を促す。まだ一万発以上残っているだろうが、何せ年に一度、今日この日しか見られないのである。一発とて見逃すのは惜しく感じる。

泉はようやくこちらに振り向いたかと思うと、俺からやや上空へと一瞥をくれた後でキツパリと言った。

「見に行つてきていいよ」

予想外の返事に、俺はしばし言葉を失う。訝しげに、花火に照らさ

れた泉の顔を窺うと、その表情はどこか憂いを帯びているようにも見えた。そんな彼女らしくない表情に、一層困惑した俺は「いや、だから。泉は見に行かないのか？」と間抜けな質問をしてしまう。いつもならここで「わかりきったことは聞かないの」と委員長よろしく嗜めてくるところだが、今日の泉はそうしない。代わりに

「私はいいよ。一人でここにいる」

と言った後で「これ、やってるから」と手に下げたビニール袋から花火セットを取り出してみせた。

「でもそれは皆でやるやつだろ」

「他の皆は自分たちの花火を用意してたみたいだし。問題はないでしょ」

どうやら泉も友人たちの企みには気付いていたらしい。初めからこの花火セットは俺と泉が二人でやるために用意されたものだった。

それ以上の反論は続かずますます閉口せざるをえない俺に、泉は困ったように言葉をかける。

「楽しみにしてたんでしょ、打ち上げ花火。去年は私に付き合わされて見られなかったから」

泉の言う通りだった。

年に一度にしか見られないあの花火は、俺にとって特別な意味を持っていた。それが、去年は泉の仕事に付き合わされたせいで、花火大会に来ることができなかったのだ。だからこそ今年は例年以上に心待ちにしていた。泉を説得しながらも、さっきから鳴りやまない背後の打ち上げ花火が気になって仕方がない、というのが正直なところだった。しかし、はいそうですかと泉を置いていけるはずもなく俺は

「だったら、打ち上げ花火を見た後でやればいいだろう」

と論理的に反論を試みていた。普段ならそういった弁舌は泉の専売特許であり、いくら俺が真似をしてみたところで理路整然とした応酬が待っていること請け合いだった。ところがそれに対する泉の反論は、ごくごく個人的で、感傷的なものだった。

「私、ああいう花火はあんまり好きじゃないし、線香花火の方が好きなんだ」

こちらに背を向けてしんみりと呟く泉の声は、委員長としての毅然とした声でも、常の惔然とした声でもない。

それは泉涼子という、ただの女の子の声。

そう感じた途端に、優秀な委員長の背中はいつか見たときよりもか弱げに見えていた。

遠くで、もう何度目になるかわからない大きな音が連発する。

突然、空に咲く大輪に目をやる泉。それにつられて、俺は空を見上げていた。

「あの花火はさ。確かにたくさんの人を引いて離さない、特別なものだけど、輝けるのは夏の夜、皆の期待に応えるときだけでしょ。そうでもなければ季節外れと煙たがられるか、時間を考えると疎んじられる……。特別なだけに、多くの人に望まれないと輝けないなんて窮屈そうだと思わない？」

「……でも、線香花火みたいに地味で目立たないよりはいいじゃないか」

唐突に始まった泉の口上に、俺は思いのほか強い語気で口を挟んでいた。彼女の言葉が単純に花火のことだけを言っているのではなく、暗に人の話をしているのだと感じたからだろ。同じように感じたことが俺にもあった。

あの打ち上げ花火を初めて見た四歳の夏は、丁度妹が生まれて一年が経ったときだった。両親は目にかけて妹を可愛がっていた。少なくとも、俺の目にはそう映った。当時の俺はそれを、妹が特別な存在であり、俺が平凡な存在だからなのだと納得した。

その時に見たからなのか、人の目を引いて離さないあの打ち上げ花火は、特別な存在の象徴として俺の目に映った。その輝きに憧れ、地味で目立たない自分のような線香花火を嫌いになった。

両親の猫可愛がりの原因はどちらか一方だったかもしれないし、或いはどちらでもなかったかもしれない。だが十数年経った結果だ

けを見れば、妹はそんな両親の愛情に応えるかのように立派で優秀で、特別な人間に育ち、俺は地味で目立たない平凡な人間に育っていた。そして俺は、そんな自分の平凡性を甘んじて受け入れ、今まで生きてきた。

高校に入って、線香花火のような自分を変えたいと半端に学級委員なんてものを始めたあの日に会ったのが、泉涼子という女子生徒だった。目を離さずにはいられない輝きを放つ、存在感の塊。あの日見た花火に似ていると思った。四歳の時に見た、特別の象徴。今も褪せない鮮烈な輝き。その輝きに、憧れた。

強く否定してしまったのはきつと、他ならぬ彼女がああ輝きを否定することを許せなかったからなのかもしれない。

泉も若干驚いたように振り向いたが「そうかもね」とすぐに首肯した。その表情はどこか穏やかで、優しく間違いを諭す教師のそれを思わせた。

泉は手に下げていたビニール袋から花火セットとチャッカマンを取り出す。水も用意していないのにと制しようかと思ったが、泉が花火セットから出したのは線香花火の束だけだった。それなら後で水を用意するのでも構わないかと思い直し、黙って見届けることにする。

泉はその場にしゃがみ込むと、一本の線香花火に火をつけた。弱々しく燃え始めるそれは、まさしく自分を見ているようで惨めだった。泉はその弱々しい輝きから目を離さずに口を開く。

「でも線香花火は、こんなにも近くで、望んだ人ひとりひとりのためだけに輝いてくれる。少なくとも私は、とても安心する」

その声は聞いたこともないくらいに穏やかで、しかし断固とした確信に満ちていた。

「確かに地味で目立たない輝きかもしれないけど、本当は一生懸命で力強いんだよ」

泉は矢継ぎ早に言葉を重ねる。そうであるようにと願い、そうであるのだと信じるように。

その言葉の一つ一つが、俺の心をほぐしてくれるのを感じていた。気が付けば線香花火は、有らん限りの力で燃え上がっている。俺もその輝きに不思議と目を奪われていた。結局、目を離すことなく火が落ちるのを見届ける。既に燃え落ちた火を名残惜しそうに見つめながら泉は言った。

「私はそれを知ってるから、そんな線香花火の方が好きなの」
そして、微笑みながら俺を仰ぎ見た。

> i 3 0 5 7 3 — 3 2 4 5 <

遠くでは、まだ大きな音が続いている。

その明かりに照らされたその顔は、やはりあの日見た花火に似て、美しかった。目を離さずにはいられない、そんな輝き。なのに、俺は思わず顔を背けていた。

その笑顔が、線香花火のようでもいいのだと、認めてくれた。それでも今はまだその言葉を、胸を張って受け止められそうになかったから。

いつか来るのだろうか。線香花火のような自分を認められる日が、それを教えてくれたこの笑顔を真っ直ぐに見返せる日が。

泉が、新しい線香花火に火をつける。

そのいつかを夢想した俺は、小さく咲き誇る線香花火の輝きを見つめていた。

花火（後書き）

オマケに続くかもしれません

夏と嵐と誕生日（前書き）

台風のお話ではない気がしますですが台風のお話です。
（横読み推奨）

夏と嵐と誕生日

誕生日前日、俺は窓の外を鬱屈しながら眺めていた。台風直撃、雨も風も大盤振る舞いである。正直、そんないつもと違う外の光景が楽しくもあつた。しかし外の荒れ模様を見ているとやっぱりツイていない気もしてきて。そんな中、部屋にあつた携帯電話の鳴る音が聞こえた。画面を開くと見慣れた後輩女子の名前。俺にとって、日常と非日常の象徴。バカでアホでトラブルメーカーで、俺の日常をしつちやかめつちかにする人間。なのに気付けばそれが俺にとつての日常になっていて。しかも驚くことに、いつの間にか俺の中でこいつは「ただの後輩」以上の存在になっていて。

メールの内容を見ると、いつも通りの普通な内容。ただの世間話。俺はソファーに寝っ転がりながらすぐ返信することにした。

新着メール

2009 / 8 / 12 22:03

From 池田瑞希

Subject: 無題

台風、スゴいですね！

私、意外とこーゆーの弱いんですよー（苦笑）

智先輩ん家の方も雨とか酷いですか？

- - - END - - -

返信

2009 / 8 / 12 22:11

To 池田瑞希

Subject: RE:

こんばんは。こっちもかなり酷いね。
でもさ、嵐とか台風とか来るとワクワクして来ない？

- - - - -
END - - - - -

新着メール

2009/ 8 12/22:18

From 池田瑞希

Subject: RE2:

あー、いますよね。 自然災害でワクワクする人……。
しかし、今年の夏はほんと天気が芳しくないですね。 おかげで先輩と花火大会も行けなかったですしっ（涙）
ところで智先輩、明日誕生日じゃないですか？何かしてほしいこととか欲しいものとかありませんか？この力ワゆい後輩が何でも叶えて遣わしますぞー

- - - - -
END - - - - -

返信

2009/ 8/12 22:37

To 池田瑞希

Subject: RE3:

哀れそうなコメントをするな！！

まあ、確かにあれは申し訳なかったと思ってるけど、仕方ないだら
！延期になんてなると思わなかったし、延期した日は神崎家総出で
妹の大会の応援に行ってた（連行された）んだから！！……まあ、
おわびつてわけじゃないけど、今度、どっか連れてってやるから。
誕生日？平和が欲しい。

- - - - - E N D - - - - -

新着メール

2009 / 8 / 12 23 : 48

From 池田瑞希

Subject : RE4 :

すみません、お風呂入ってたッス。

へえ、1コ下の後輩だけじゃ飽き足らず、3つ下の妹さんまでも
その毒牙にかけたという事ですねー。先輩がそんな人だなんて知ら
なかったです。今まで騙されてたです！あ、急にデラックスストロ
ーベリーアンドチョコレートパフェが食べたくなったです。

平和……ですか。先輩にとって平和ってなんですか？嵐が去って、
お天気になれば平和ですか？みんなと一緒に遊んでいられる日々が
続けば平和ですか？それとも、戦争がなくなれば平和ですか？

私は。私には。平和が欲しいって言われても、難しいです。

- - - - - E N D - - - - -

To 池田瑞希

Subject: RE5:

別にそんな報告しなくていいよ!!

はいはい、今度何かおごつてやるよ。500円以内ならな。

……月並みなセリフかもしれないけどさ、平和なんて簡単なものだよ。少なくとも、俺が求めてる平和はね。だって、お

新着メール

2009/ 8/13 00:00

From 池田瑞希

Subject: RE4:

先輩お誕生日、おめでとーッス!!

夢の18歳ツスねアドアルティツスね(笑)

……私は、私流で行くんで、先輩の期待に添えるかわからないですけど

頑張るので……でも、平和になれなかったら、ごめんなさい。

何はともあれ、おめでとーッございます!

- - - END - - -

返信

2009/ 8/13 00:06

To 池田瑞希

S u b j e c t : R E S :

明日……いや、今日か。11時にいつものカフェで待ち合わせ。そこから1日俺に付き合ってくれれば、それが俺への誕生日プレゼント。俺の平和についてみつちり語ってやるから、覚悟しとけよ？
それじゃあ、おやすみ。メール、ありがと。

- - - E N D - - -

2009 / 8 / 13 00:06

F r o m 神崎智

S u b j e c t : エピローグ

携帯電話を閉じ、部屋の電気を消し、ベッドへ横たわる。普段明るく元気な後輩は、珍しく自分の弱い部分を露呈させた。俺はいつも無愛想だから、きつと俺のことになると自信が持てなくなってしまうのだろう。本当はそういうところ治したいのだけれど、そういうのって不思議なことに今更治せないと思ってしまふもんだよね。まあ、何はともあれ、明日は多少なりとも恥ずかしい事を言う羽目になりそうだ。きつと後輩はそれをニヤニヤしながら聞いて「先輩、可愛いとこありますね」とか言うんだろうなあ。……そう思ったら急に明日のこと取り消したくなってきた。でもまあ、そういう日々をずっと一緒に過ごしてきたら俺の「平和」わかってもらえるかな？さて、もう寝るとするか。目覚ましもちゃんとセットしてつと。それでは、瑞希と過ごす平和な時間のために、おやすみなさい。

- - - E N D - - -

夏と嵐と誕生日（後書き）

オマケに続くかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9166s/>

日常トリム

2011年10月2日23時14分発行